

いろいろな花の花束

和知 喜八

うまい句

書店に入ってみると、俳句の入門書が並べてある。これから俳句を作ってみようという人は、ひととおり入門書を読んで、俳句の基礎知識、俳句とはどういうものかを知っておくのがよい。さらに、これは作句の傍らでもよいが、芭蕉・蕪村・一茶・千規、それから現代俳句の流れを概観しておけば申し分ないのだが。

俳句との出会いはさまざまだが、たまたま俳誌を手にしたとか、俳句会に誘われて句を作るようになった、というのが多いようである。俳句を作り続けてゆく中で、だんだん分かってくるというケースである。

このような作り方は、うまい俳句を作りたいという思いから珍しい発想、巧みな表現などにひかれて、人の俳句に凭れて作句してしまいうことがある。類想、類似、類型句とはつきりしていなくても、既成の俳句的情趣で詠った句には新鮮さがない。

良い句と、うまい句とがある。うまい句のことで、今でも鮮やかに記憶に残っていることがある。俳句を作るようになってから一〇年ほど経ったころのこと、二〇句ほどまとめて師楸邨に見ていただ

いた。句の上に赤い鉛筆で幾つか〇をつけた楸邨は一言、「全体にうますぎるよ」と言われた。

誰でも良い句を作りたいと希うのは当然のことだが、まず把握が確かでない、表現したい言葉が見えてこない。そんなときは外側から飾り立てたくなる。本当に詠いたいものを、自分の言葉で一句を貫いて詠いきらなければ駄目だということ、師楸邨の言葉を納得したのは、それからしばらく後のことである。

成長してゆくということは、いろいろなものを吸収して学んでゆくことだ。しかし、己れを見失ってはならない。

没の句

句会や俳誌、新聞などで没の俳句は、毎月どのくらいあるのだろうか。そして、その没の句はどうなっているのだろうか。

ところで、わが居住の区で文化協会なるものを創立することにより、調べたところ区内で毎月二二の俳句会が行なわれていることが分かった。俳句会は結社の地区グループがほとんどで、駅昇降者俳句会というのもある。

俳句会の出句は集まる人数によって二、三句から五句とまちまちだが、互選で点が入り好評のものはせいぜい三分の一程度で、推戴して生かされる句もあるが、そのほかはだいたい没の句ということになる。

没の句の問題は結社誌に投句する場合も同様で、同人の場合は別として、雑誌欄の巻頭に近い何人かは全句入選であるが、その他とくに終わりのほうの二句か一句入選の作者の句は、巻頭の作者の句数との差だけ没になっているわけで、没の句数は入選句数を上回っ

ているようである。この比率は、入選句の限られている新聞、雑誌の場合はぐんと高くなる。

本誌の『俳句年鑑』四十八年版の「主要結社の動向」に挙げられているのは二二二誌、一誌を仮に一〇〇〇人とすると二二万二〇〇〇人、毎月投句五句として一〇六万句という膨大な数になる。ほかに全国で発行されている俳誌はどのくらいあるのだろうか。今日の俳句人口は一千万余と言われているが、この人達の膨大な没の句のことを考えると、このままでよいのか、なんとか方法はないものかと反省させられる。

何事でも創作するということは努力の積み重ねの末に生み出されるものだが、それにしても没の句は、生かされた句にどのような働きをしているのだろうか。全く無駄なものだったのだろうか。

いずれにしても、投句するとき手帳に改めて書き止めておいて、結果と照合してなぜ入選したのか、どうして没になったのか、ゆっくり検討し反省して、次の俳句の参考にするくらいのこととしては必要があるのではないか。

水子地蔵というのがある。針供養というのもある。没の句の供養をすることも、大事なことである。これからの自分の俳句をどう育ててゆかかという俳句姿勢も、こんなところから育ってくるのではないか。

自分の句

常住座臥の日常のなかで自分に忠実に生きるのは至難のことで、自分の存在の意味を確認するのはむずかしい。俳句はもの「自然、対象」との出会いによって、刻々の生「いのち」を詠う文学である。

写生、把握ということを斎藤茂吉は「真相観入」、加藤楸邨は「真実感合」という方法で、人間参加、人間参透を提唱した。

野性と英知が文化を踏まえて立っている。私たちが自分となることで、社会となる契機がここにある。俳句の類想、類似、類型の問題は、そのことの良し悪しを言ってみても仕方がない。要は人の句に凭れてうまい句を作る態度を、自分を詠い出す姿勢に切りかえることだろう。本当に自分の句を作るといことは、人の俳句から離れることだと言ってもよい。

社会の中にいる個人、結社の中にいる自分、およそものを創造するといふような仕事は、そうした孤独な中から産み出されるものだろう。ところが一結社、一句会にながくいると、いつの間にかそれなりの世界ができてしまうもの、土壌の瘦せである。そんなときは詩歌・画・絵・芸能なんでもよい。美しいものを、美しいと見ることが大切である。常に自分の土壌を大切にしておくこと、自分の句が花ひらくのはそこ以外はない。

たとえば、このような句がある。△雪しきり転動のこと考えず▽△短日の午後大阪に会議あり▽。省略、屈折、抒情に乏しく、没になりそうな句だが、自分で立てている句といいていい。

結社の中でも句会のようなところでも、とにかく自分を大事にして作句するように言ってきた。私たちは薔薇の花束であってほならない。各自が自分の詩を立派に詠いあげた、いろいろな花の花束でありたい。